

慈恩大師基の浄土教思想

— 仏身論・仏土論を中心に —

文学研究科 仏教学専攻 博士後期課程
学籍番号 4120040001 林 香奈

基(632-682年)はインド遊学と經典の翻訳で有名な玄奘の高弟であり、玄奘がもたらした瑜伽行唯識学派の経論をもとに、中国法相宗の教義を確立したことから、日本においても法相宗の初祖とされる。玄奘が經典訳出のため住した唐の都長安の大慈恩寺に師の死後もとどまり、そこで生涯を閉じたことから、後代に「慈恩大師」と号されるに至った。基が『成唯識論』を根本聖典として構築した法相唯識は、玄奘以前の中国仏教界に存在していた地論学派や摂論学派の説とは異なる、新たな唯識思想を提示するものであり、奈良時代には日本に伝えられ、南都六宗の中でも最大の宗派の一つである法相宗を成立させている。基が中国・日本の両仏教に与えた影響は、非常に大きかったと言えよう。

中国においても日本においても、その後は実践的な禅宗や浄土思想が仏教の中心となっていき、煩雑な理論を有する法相唯識が注目されることは少なかったとされている。しかし、中国仏教の諸派が競うようにそれぞれの教義を確立し、まさに百花繚乱ともいえるべき様相を呈したのは、隋から初唐期にかけてであった。基はまさにその時代に生きたのであり、玄奘からインド伝来の唯識思想を受け継いだこともあって、時代的にも思想的にも、中国仏教史上非常に重要な位置を占めている人物である。よって、その思想に対する先行研究も多く、基の特定の著作を中心に、その思想を解明しようとする試みとしては、『成唯識論』の注釈書である『成唯識論述記』(以下『述記』)と『成唯識論掌中樞要』(以下『樞要』)から法相唯識の思想体系を総合的に解説した深浦正文、『説無垢称経疏』(以下『無垢疏』)から基の『維摩経』解釈の特徴を論じた橋本芳契、『因明入正理論疏』(以下『因明疏』)から基の因明の理解をインドの論理学と比較した江島恵教、『妙法蓮華経玄賛』(以下『法華玄賛』)から基の一乗思想・仏性論を探る常盤大定、勝呂信静、寺井良宣、吉村誠などの研究成果がある。また、近年では廖明活や陳宗元といった海外の研究者による研究も進められつつある。

そのような中で筆者が今回、基の仏身仏土論を主題として研究に取り組んだことには、いくつか理由がある。第一に、深浦の研究は全体的に極めて詳細でありながら、仏身仏土論に関しては『成唯識論』に沿ってその内容を概説するにとどまり、『仏地経論』に基づく細部の議論については、ほとんど明らかにされていないためである。

第二は、玄奘から唯識教学を受け継いだ基が、どのように自らの思想を反映させて法相教学として大成したかを考察するためである。従来の研究では、玄奘と基の思想の違いすら解明されていなかったが、近年複数の研究者により玄奘とその門下に関する研究が進められてきており、基の思想についても当時の中国仏教界の状況や玄奘との差異など、深浦とは異なる視点で研究をする必要性が感じられる。

第三は、基自身の人間像に迫る上で、仏身仏土論は一つの有効な回答を含んでいるためである。基は法相宗初祖という位置づけや、その出自から、後代の伝記においてさまざまな伝承による脚色をされているが、その本来の人物像に迫った研究はほとんどなされていない。本論で基の著作を総合的に読み解き、仏身仏土論を通して基の思想だけではなくその背景をも論じることで、一人の人間としての基のすがたを少しでも明らかにしたいと考えたのである。

以上の目的を達成するために、本論では次のような構成で執筆を進めた。

<第1部 文献研究篇>

第1章 基の伝記資料とその事跡

基の伝記については、多くの資料が現存しているが、先行研究を大別すると二つの傾向があるように思われる。一つは、基の事跡を取り上げたものである。これは、基だけではなく玄奘や中国法相宗第二祖の淄州大師慧沼(649-714年)、第三祖の撲揚大師智周(677-733年)などの伝記も合わせて語られることが多い。もう一つは、基の伝記資料に関するものである。この研究では、『宋高僧伝』などのほかにも、碑文や讚などの資料を広く収集しているため、基の伝記をより総合的に研究する上で大いに参考になる。

従来の研究は、この二つの何れかに属していたが、前者は法相宗初祖というフィルターを通して基の人物像をとらえがちであり、後者は資料の集成のみで完結し、内容の検討をほとんど行っていなかった。よって、本論文では両者の問題点を補うべく、資料の中でも基の生前もしくは没後まもなく作成されたと考えられるものを中心にして、基の人物像をいくらかでも実像に近いかたちで解明することを目指した。

まず、資料の成立年代の推定を行った結果、基自身が著した『枢要』に述べられている自伝的記述を除けば、基の生存時に成立したと考えられるのは「心経幽賛序」、「成唯識論後序」、「唯識二十論後序」の三本であった。ここに記されている基の事跡は、かなり信憑性が高いであろう。次に重要なのは、基の死後数十年以内に立てられたと考えられる「大唐慈恩寺法師基公碑」の碑文である。本論では主にこの五本の文献をもとにして、基の事跡を考察した。

これらの資料によると、基の祖先は北方の異民族だが、数百年の間に漢化し、初唐期には軍事の名門として誉れ高い一族となっていた。しかし基は9歳で両親のいずれかの死に会い、強く出家を願うようになり、17歳で玄奘の門下に入った。性格は勤勉で、議論となれば負けることがなく、高潔にして言動穏やかであり、研鑽を積み28歳にしてついに玄奘と二人で『成唯識論』を訳出した。数年後に玄奘が没してからは、生前の玄奘の講義録を

編纂して論疏を製しながら、各地で唯識の論書やいくつかの經典について講義をしているが、『維摩經』や『法華經』などの講釈はかなり強引なかたちで依頼されており、基が苦勞しながらその要請に応えたことが各經疏の奥書から読み取れる。基の教化は中原から博陵や蘇州といった沿岸地域まで広範囲に及んでおり、永淳元（682）年十一月に大慈恩寺の翻經院にて示寂するまで、唯識の宣揚に生涯を捧げたという。

このような基の人物像は、基の死後 300 年以上経ってから編集された『宋高僧伝』における基の伝記の記述とはかなり異なっている。『宋高僧伝』では、基は才氣あふれる青年だが、異民族の軍人の家柄らしく粗野で傲慢な態度をとり、玄奘から再三にわたり出家を促されても拒むほか、同門の円測との競争に躍起になるなど、僧侶らしからぬ剛毅で型破りな人物として描かれているからである。その一部が誇張であろうことは先行研究でも指摘されていたが、本章では初期の伝記資料から基の事跡を浮かび上がらせることで、その具体的な違いを明らかにすることができた。

第 2 章 基の著作の撰述過程と真偽問題

基は「百本の疏主」と称されるほど多くの著作を残したことで知られており、現存するものだけではなく散逸したものや真撰が疑われるものも含めれば、全部で 41 部にも及んでいる。だが、それらの成立過程や真偽問題に総合的に取り組んだ研究は極めて少ない。ほぼ唯一の先行研究として、保坂玉泉が基の撰疏の相互引用関係を調査することで執筆年代の推定を行ったが、これは真偽判定にはある程度有効であっても、基の著作は相互引用が極めて多く、保坂は引用関係によって製疏の時期を推定するのは困難だと結論に至った。そこで筆者は、引用関係の確認に加えて、撰疏の中に記された執筆経緯についての記述も参照し、基の著作の撰述過程を解明することを目指した。

また、基の著作の中で唯識系であっても、その成立過程や内容に疑問が呈されているものがある。それが『大乘阿毘達磨雜集論述記』（以下『対法抄』）と『大乘法苑義林章』（以下『義林章』）である。本論では第 3 章以降、基の仏身仏土論について論じるが、『対法抄』と『義林章』にはこれに関連する記述も含まれているため、これらの真偽を明らかにすることで、第二部の研究で用いる資料を確定することを試みた。

調査方法は、基の著作とされる章疏の中で、同じ基の著作である別の章疏を引用したり、あるいは言及している箇所を数え、それぞれの言及内容を調べるというものである。ある著作の中で別の疏がたびたび引用され、それらのうちのいくつかでも現存する章疏の中に該当箇所が見つかれば、二本の章疏の成立の前後が判定でき、両本が基の真撰である可能性も非常に高まる。このような手法と、章疏の中の基の執筆経緯に関する記述をもとに、筆者は以下の結論に達した。

- ・經疏は、『般若心經幽贊』、『大般若經理趣分述讚』、『觀弥勒菩薩上兜率天經贊』（以下『弥勒上生經贊』）と『無垢疏』、『法華玄贊』の順におおむね成立した。この点は先行研究とほぼ同意見であるが、『法華玄贊』は思想的に整理されており、『無垢疏』などよりもいくらか後の成立である。

- ・論疏は、『述記』や『枢要』が非常に早い時期に成立したと思われるが、『枢要』は『法華玄贊』に言及しており、『述記』も晩年の作と思われる『瑜伽師地論略纂』を引いている。同様のことは『弁中辺論述記』にも見られるため、基の著作ではかなり長期にわたって加筆修正が行われたと考えられる。
- ・『因明疏』は唯識の教理の理解に因明が不可欠であることから、『述記』などが成立する660年代後半と同時期に書かれたと考えられる。『異部宗輪論述記』は短いため、論の訳出からあまり時間をおかずに成立したであろうが、『唯識二十論述記』は玄奘が没する記述があることから、660年代後半から670年代にかけて完成・修正されたと考えられる。
- ・『対法抄』全十巻の中で、巻第一は慧沼の『成唯識論了義燈』に引用されているため、真撰である。残る九巻の真偽は不明だが、巻第一と比べると、他の基の章疏との対応確率が下がっていくため、偽撰の可能性が高い。
- ・『義林章』は基の章疏の一部を抜き出して編集するなどの過程を経て成立した著作である。「仏土章」については本来『無垢疏』の一部であったことが確認できた。

<第2部 教理研究篇>

第3章 基の仏身論

仏教にとって究極の目標は仏となることだが、その仏の身体について、さらに言えば「仏とは何か」という、仏教の根源的な問題について論じているのが仏身論である。大乘仏教の初期には、釈尊に代表される生身の仏と、究極的真理そのものである法身の仏という二身説が説かれている。その後、唯識思想の発展とともに仏身論は二身説から三身説へと展開し、真諦訳『撰大乘論』や『金光明経』などには、自性身・受用身・報身・応身・化身といった、さまざまな概念や呼称の仏身が記されるに至った。

それらの仏身の異同を体系的に論じ、仏身論を中国で最初に整理したのは、地論宗南道派の大成者、淨影寺慧遠(523-592年)である。慧遠は『大乘義章』「三仏義」において、仏身を真如法性である法身・過去の修行の結果として得られる報身・衆生教化のためさまざまな姿を現す応身という三種に区分する三身説を提唱した。これは中国仏教における代表的な三身説の一つであるため、本論では基が、『義林章』「三身義林」にて、法相唯識の立場から立てた三身説との比較を行い、共通点と相違点から基の仏身論の独自性を探ってみた。

基の仏身論は『成唯識論』と『仏地経論』に基づいており、清浄法界である自性身、大法樂を受用する受用身、衆生のために化現する變化身の三身説を基礎としつつ、受用身を仏自らが法樂を味わうための自受用身と、十地の位の菩薩に法樂を味わわせるための他受用身に分けることで、実質的には四身説を展開している。慧遠の三身説と比較すると、一見両者は非常によく似ている。だが、慧遠と基の根本的な違いは、それぞれの仏身の本体をどう解釈するか、最も明瞭に現れている。慧遠は、すべての仏身は真如を体としており、真如とは我々の本来清浄なる心(第八真識)にほかならないという如来蔵思想に基づいた説を述べた。一方、基は玄奘の主張を受け継ぎ、法身あるいは自性身の体を真如すな

わち清浄法界としても、その清浄法界は我々の煩悩に覆われた心（第八阿頼耶識）とは異なり、その第八識を転じて得られる智（大円鏡智）とも異なるという解釈をとっている。

また、本章では仏身の体に関しても考察し、勝又俊教らが考察してきた『仏地経論』と『成唯識論』における正義の違いについて、基が中観派の思想との関係を述べていることを明らかにした。『成唯識論』において清弁等の説を退け、唯識教学としての仏身論を明確に打ち出した背景として、基の玄奘への働きかけの可能性も考えられるのであり、インドの諸論師や玄奘の思想の反映に視点が置かれていた先行研究とは異なる立場から、『成唯識論』の成立と基との関係を考察したのは、本研究の成果の一つである。ほかにも、經典によって『仏地経論』や『成唯識論』の説に正当性を持たせるために、基は『金光明経』に独自の解釈を加えている。これは『述記』に書かれていないことから、玄奘によらず、基が自ら考案した解釈だと言える。

それ以外に、本章では『仏地経論』と『成唯識論』における仏身の変現のメカニズムについて、『対法抄』巻第一と合わせて改めて解明を試みた。佐久間秀範の先行研究では、自受用身が実の四智によって現し出され、他受用身と変化身が化現された存在であることは指摘されていたが、その化現された像がどのようにして我々に認識されるのかについては明らかになっていなかった。本論では、上記の論と疏を細部まで検討することで、大円鏡智の相分にほかの三智が衆生の機根に合わせた無数の仏身の影像を現し、それぞれの智が大円鏡智を撃発すると、大円鏡智が撃発した智のはたらきに応じて変化した像を衆生のために現し出し、それらの無数の仏身は仮の存在だが仮の心を有しているため、我々がそれらの仏身の仮の本質相分を増上縁として自身の第八識の本質相分に浮かべると、あたかも我々と同じ心を有する一人の仏が目の前に見えるかのように見える、という具体的な構造を明らかにした。

第4章 基の仏土論と浄土思想

仏土論は仏身論と対をなしており、隋から唐にかけての中国仏教における主要なテーマの一つであった。仏身論が仏とは何かを追求しているのに対し、仏土論は仏国土あるいは浄土とは何かを論じるものであり、当時盛んであった浄土信仰とも深く関わっている。また、基は中国浄土教の大成者善導（613-681年）と同時期に、同じ長安で活動していたこともあり、『義林章』「仏土章」ではしばしば浄土教を意識していると思われる記述が散見される。だが、基の浄土思想とえば、従来の研究では「仏土章」のごく一部のみが注目されてきたため、本論では仏土の定義や往生の因についても考察しながら、基の仏土論の独自性と善導の浄土教に対する反応およびその背景を考察した。

仏土は仏身に対応するため、仏身が四身ならば仏土も四土になる。だが、仏身とは異なり、仏土には浄穢や有漏無漏、三界摂不摂といった問題が付随している。どの仏土が浄土なのか、その仏土はどこに位置しているのか、そしてそこは煩悩のない無漏の仏土と言えるのかというのは、この苦しい娑婆世界から離れ、幸福に満ちた浄土に生まれたいという衆生の願いに応えようとする仏教者にとって、重要な論点となるからである。

基もまたこの問題に取り組んでおり、その姿勢を一言で表すならば、唯心浄土説と言えるであろう。基は『説無垢称経』（旧訳では『維摩経』）などを例に挙げ、舍利弗が変化土としての娑婆世界（穢土）を見ているとき、持髻梵王が他受用土としての娑婆世界（浄土）を見ていたように、衆生の機根によって見える仏土は異なるとした。これは、一つの仏土が他受用土（報土）と変化土（化土）に通じているという、通報化説である。

このような法相唯識の教義に基づく唯心浄土説に立てば、有漏無漏や三界摂不摂は浄土と直接的には関係がなくなる。なぜなら、いくら浄妙な仏土であっても、それを變じている有情の第八識について言えば、この識は成仏するまで有漏であるから、その浄土もまた有漏土となる。また、浄土は心の所変であるから、三界の中か否かという浄土の空間的な位置よりも、自身の心が清いかどうか仏土の清らかさにつながるのである。

基はこのような解釈に基づいて西方浄土についても分析し、これを他受用土に限定する唯報説と、通報化説の二釈を述べた上で、どちらを選ぶかは各自の判断に任せている。従来の研究では、基は通報化説に立っているのであろうとされてきた。しかし、本論では『義林章』『三身義林』や『弥勒上生経賛』などに、阿弥陀仏とその浄土を他受用の身土とする根拠が随所に述べられていることを証明した。これによって、基が弥陀唯報説に強い関心を持っていたことが知られるのである。基は通報化説を否定してはいないが、西方浄土を唯報とすることで、逆に凡夫の往生を不可能とする論理を展開すべく、その根拠をさまざまに提示している。唯識の立場であれば通報化のみで説明できるところを、あえて唯報説を別に立て、それを詳細に論じているところに、基の心情が表れていると言えよう。

その背景には、自らの弥勒信仰を擁護しようという基の意図があると考えられる。弥勒の浄土である兜率天は、三界の中にある変化土であり、他受用土としての西方浄土と比較すると、優劣は歴然としている。だが、唯識で解釈すれば、どのような仏土であろうと有情の識の状態で有漏無漏、三界摂不摂が決まるのであり、またそもそも他受用土である西方浄土には我々凡夫は往生できない。だからこそ、変化土である兜率天には、我々にふさわしい浄土としての意義があり、我々が心を清くするならば、西方浄土との優劣も薄らぐのである。これは、基の仏身仏土論を表面的に解釈しては理解しにくいところであり、本章において初めて、基の浄土思想についても解明が進んだと言えるであろう。

なお、本章のもう一つの成果として、仏土の因に無分別智・後得智・加行智といった智をあてる基独自の仏土の因の体系の解明がある。仏土の因の体系については慧遠も『大乘義章』で論じているが、基が仏土の因を智で統一したのは、『摂大乘論』や『仏地経』に説かれる仏や菩薩のための浄土の因が、無分別智と後得智だとされていることに由来していると思われるのであり、唯識系の経論によって変化土も含めた仏土の因の体系を構築したのは、基のオリジナルな発想であると言えるだろう。

本論により、基の論じた仏身仏土論の細部の構造について、かなりの内容を明らかにすることができたと考えている。法相唯識全体としての仏身仏土論については未だ解明されていない部分もあるが、それは今後の課題として、引き続き研究に取り組んでいきたい。